

浮世絵と描かれた江東⑥

浮世絵の楽しみ方

江東区深川江戸資料館

現在開催中の企画展「こうとう浮世絵づくし」の会期も残すところあとわずかとなりました。資料館ノート142号から146号まで本企画展の内容を掘り下げてきましたが、最後となる本号ではより深く作品を楽しむために、浮世絵の製作過程や見方を紹介していきます。

1. 浮世絵（錦絵）ができるまで

浮世絵版画は、絵師が描いた絵をもとに版木を彫る彫師、その版木から紙に摺り出す摺師など数々の職人の手を経て、最終的に版元と呼ばれる人たちの元から世に送り出されます。

①浮世絵師の仕事

浮世絵師は、浮世絵版画の下絵を描くだけでなく、肉筆や挿絵、団扇絵、配り物や包み紙の表紙絵にいたるまで様々な種類の製作に関係していました。

多色刷の錦絵を製作する際の浮世絵師の大きな仕事は、「下絵を描くこと」と「色の指示を出すこと」です。版元から依頼を受けた絵師は、まず直接原稿となる「版下絵」を墨一色で描きます。この時、絵師

自身が構想を固めていく場合と、版元からの意見を取り入れながら修正する場合があります。完成した版下絵は彫師に届けられ、彫師はそれをもとに版木を製作し、「校合摺」という墨一色のみの版を何枚か摺ります。校合摺は、絵師の手によって「どの場所にどんな色を載せるか」の色分け指示が書き込まれます。この作業は最小限の色でどれだけ効果的に作品をよく見せるかの工夫が必要とされ、作品の出来栄を左右する重要な仕事のひとつでもありました。

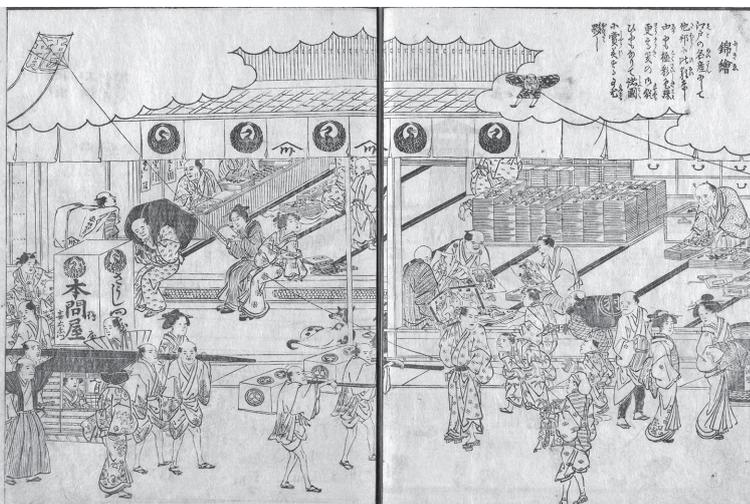
②彫師の仕事

彫師は「版木屋」とも呼ばれ、文字を彫る「文字彫り」と、絵を彫る「絵彫り」に分かれていました。浮世絵版画を彫るのは主に後者で、その中でも彫師の腕によって任される絵の箇所は違っていました。特に、人物の髪が生え際や目鼻などの高度な技術を要する箇所は「頭彫」と呼ばれる師匠、またはそれに準ずる職人が行い、そのほかの比較的技術を要しない背景や文様などは「胴彫」という職人が担当しました。経験を積んだ師匠のもとに弟子入りした職人が一人前になるには通常10年の年季が必要とされています。

③摺師の仕事

摺師は、彫師と同じように、主に文字を摺る「黒摺職」、錦絵などの多色摺の絵画を摺る「色摺職」に大きく分かれています。色摺職は、手の込んだ様々な摺りの技術を取得するほか、色の多い絵を摺る際の版ずれが生じないように紙の湿り具合の微妙な調整をするなど、やはり熟練の技が必要とされました。

摺りには、和紙の厚みを利用し絵を立



「江戸名所図会 卷之一」 斎藤長秋(著) 長谷川雪旦(画) 天保5年(1834) 館蔵
浮世絵を「江戸の名産」として店頭で売り出している様子が描かれている

体的に見せる「空摺・きめ出し」、角度を変えて見る
 ことによって絵が輝いて見える「正面摺・雲母引」
 など実に多種多様な技術がありました。

④版元

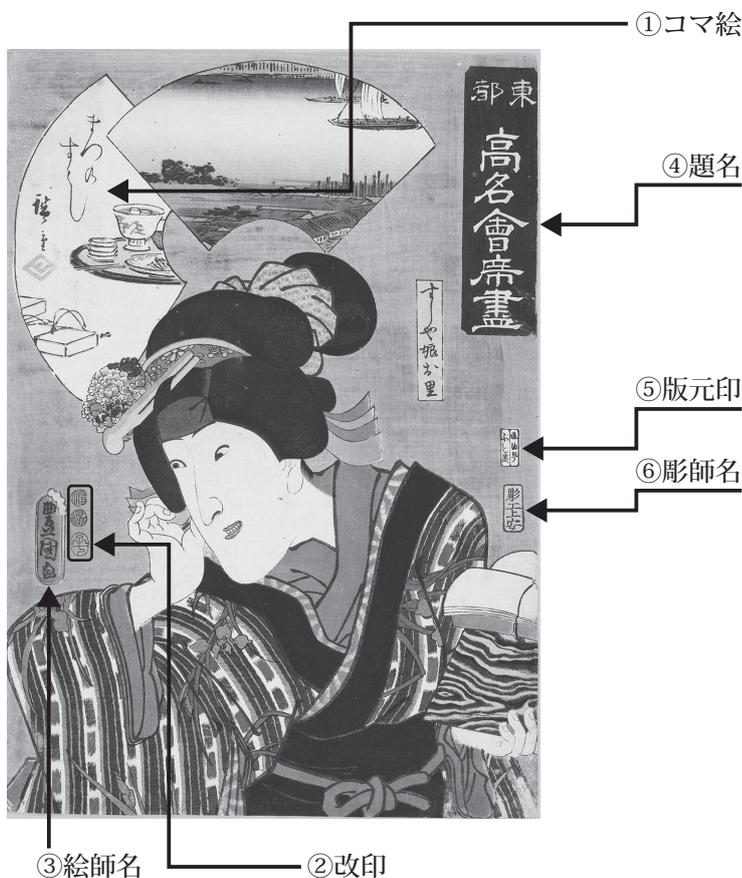
いまで言う出版本屋のことを指し絵双紙屋や地本問屋などと呼ばれました。版元は単に作品を売るだけでなく、企画から版行、販売までを一手にこなすなど出版の権利や責任を担う役割もありました。

版元として成功するには、庶民がどんな娯楽を求めているのかをかぎ分ける流行への敏感さ、作家や絵師などの新たな才能を発掘する目利きとしての能力のほか、人脈作りの上手さなどのマルチな商才が求められました。

2. 浮世絵の仕組み・見方

①コマ絵

「小間絵」「駒絵」とも書き、画中画として、画面



「東都高名会席尽 すしや娘お里」歌川豊国
 嘉永5年(1852)江東区教育委員会蔵

の右上や左上の隅に枠に囲まれて描かれ、メインの絵の補足をする意味合いがあります。この絵には「まつすし」とあり、鮓屋「松の鮓」*の名前とコマ絵を描いた絵師「広重」の名前が記されています。

*「松の鮓」は新大橋近くの安宅六間堀にある江戸有数の鮓屋。

②改印

浮世絵の刊行に際して検閲を受けた証として捺される印です。「村松」「福」の二人の名主の印と、「子七」(正しくは子十)とあり、嘉永5年10月に検閲を受けたことが分かります。

③絵師名

浮世絵を描いた絵師のサインにあたります。「豊国画」とあり、歌川豊国(三代)が描いたことが分かります。

④題名

作品の題名です。この作品は「東都高名会席尽」というシリーズ名が記されています。

⑤版元印

浮世絵を出版した版元の印章です。「通油町 ふじ慶」とあり、藤岡屋慶次郎という版元が出版していることが読み取れます。版元印は、浮世絵を出版する際に責任の所在を明らかにするために捺されます。

⑥彫師名

浮世絵を彫った彫師の名前です。江戸末期ごろになると彫師の地位が向上し、版木に刀銘を彫りこむことが流行しましたが、摺師の場合は誰が摺るかの決定が遅かったため、作品にその名前が残されることはほとんどありませんでした。

【主な参考文献】

国際浮世絵学会編『浮世絵大辞典』(株式会社東京堂出版/2008年)ほか